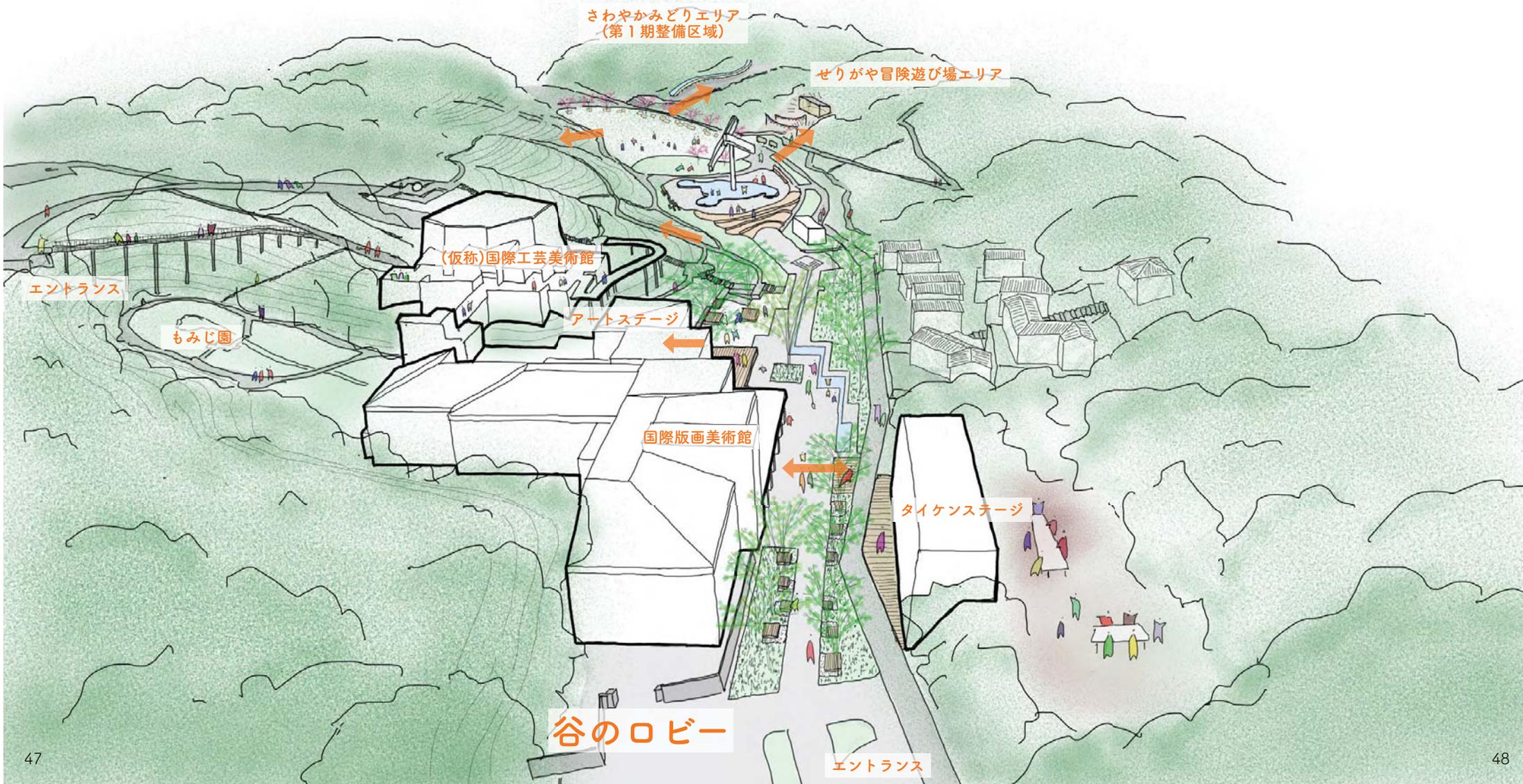


§ 4

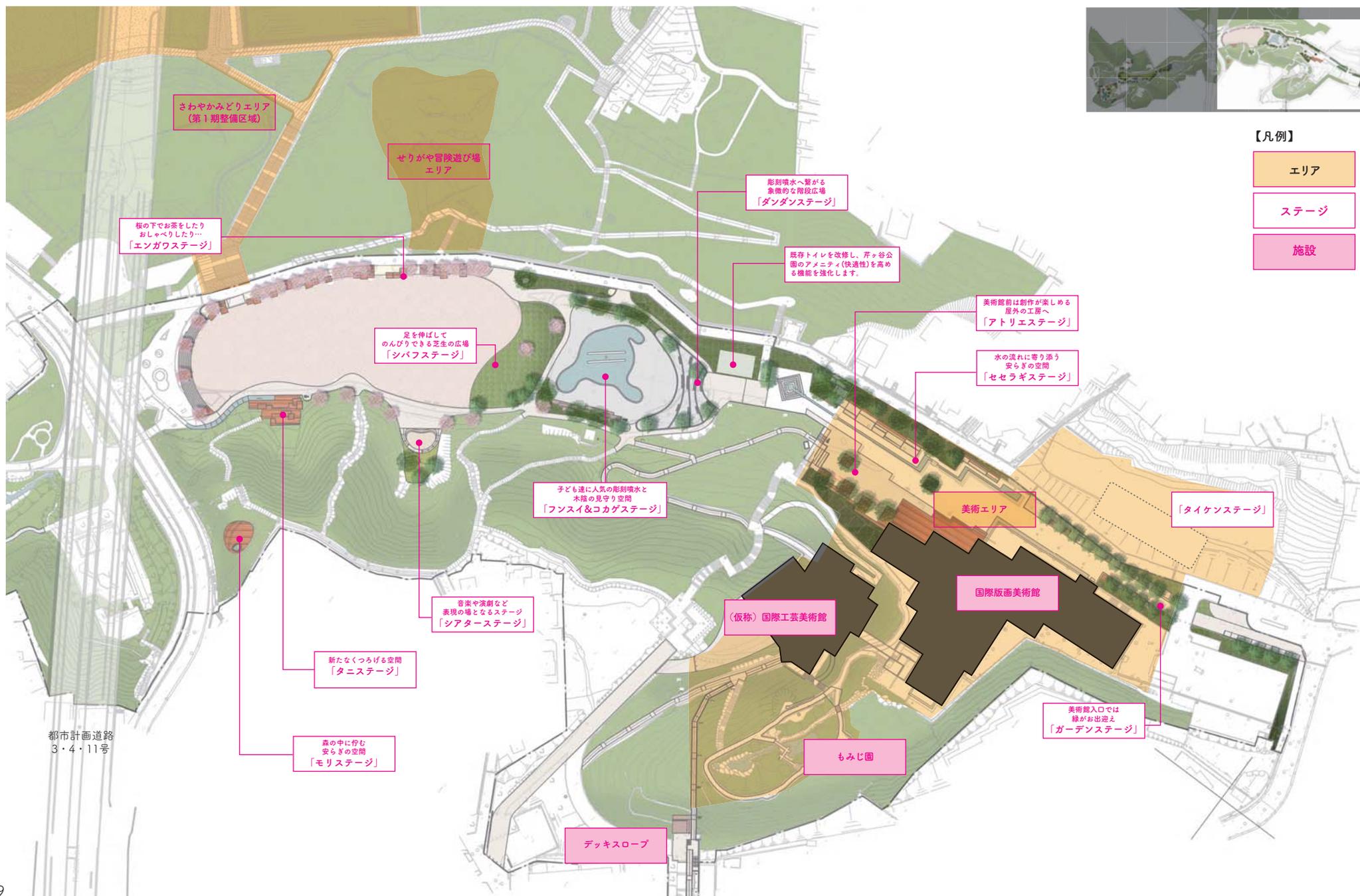
パークミュージアム全体の整備計画

多様なステージが集う活動の中心ゾーン 「谷のロビー」

谷のロビーは様々なアクティビティが共存するにぎやかな空間です。美術エリアなどの"エリア"と、様々なかたちの"ステージ"が面する活動的な空間構成です。谷のロビーと周辺エリアとの連続性が重要であり、ステージの整備とあわせてロビーを分断する段差やスロープや生け垣などを見直しながら面的な広がりを出します。

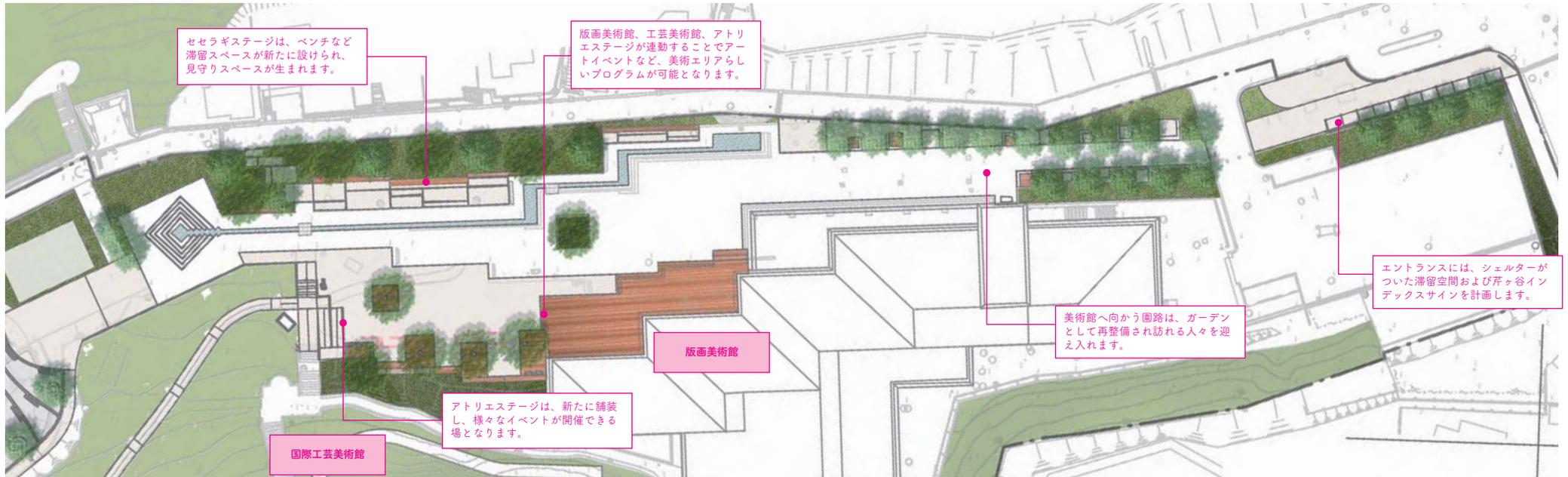


「谷のロビー」全体配置図



美術館を拠点としたアート&カルチャーの発信地

国際版画美術館周辺には、エントランス空間となる「ガーデンステージ」、イベント開催を想定して新たに舗装された広場空間「アトリエステージ」、水路を中心とした「セセラギステージ」という3つのステージを整備します。ガーデンステージは、多くの人々を迎え入れるための空間として、サインや滞留スペース、そして緑のガーデンを整備します。「アトリエステージ」は、ワークショップをはじめとした体験型のアートイベントなどが開催できる設えを持ったイベント広場となります。「セセラギステージ」は、水遊びする子どもを見守るためのベンチ、スペースを整備します。



工芸美術館からセセラギステージを臨む。



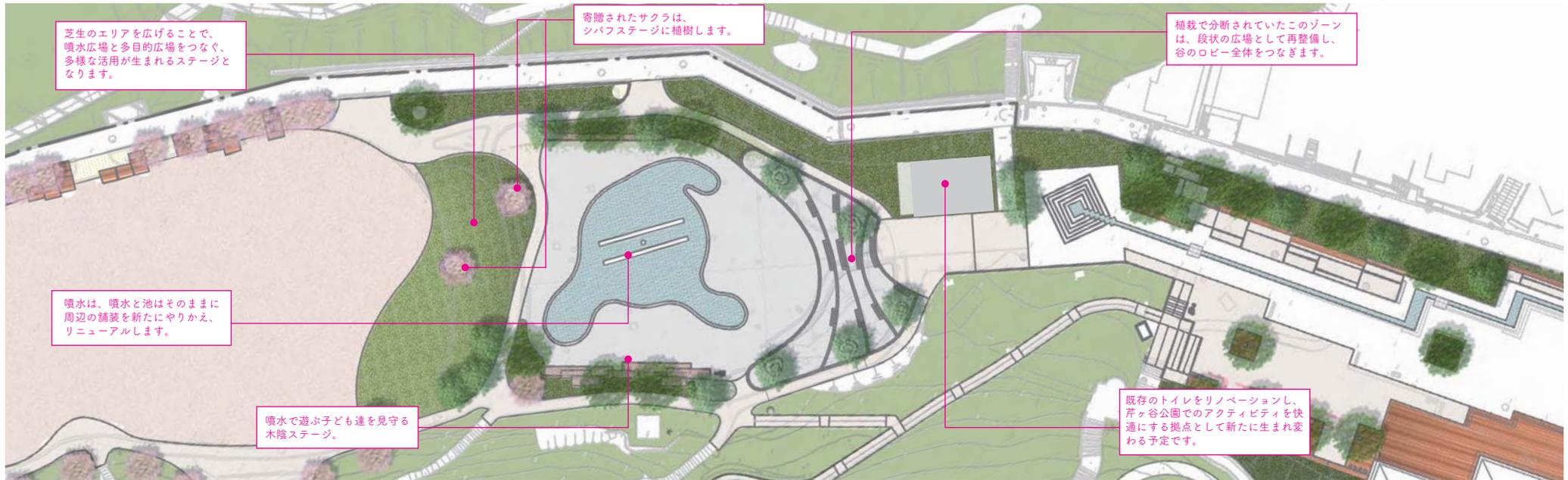
アトリエステージ。新たに舗装され、様々なイベントが開催可能な場となります。



芹ヶ谷公園のエントランス。芹ヶ谷インデックスサインと滞留スペース(屋根付き)を計画し、人々を迎え入れます。

大人気の噴水アートと周辺に生まれるステージ

谷のロビー中心部にある大人気の彫刻噴水周辺では、美術エリアと多目的広場側の見通しをよくするため、視界を遮っている植栽を減らし、ロビー全体の一体感を作り出します。また、噴水を中心にその周辺には、高低差を生かした階段広場「ダンダンスステージ」や、噴水で遊ぶ子どもたちを見守る「コカゲステージ」、足を伸ばしてのんびりできる「シバフステージ」を整備します。ゆっくりと寛げる日常的な「居場所」を整え、様々なアクティビティの展開や、多目的広場で行われるイベントなどと連動した活用を行います。



多目的広場から「シバフステージ」ごしに噴水アートをみる。シバフステージにはサクラなど樹木が植えられます。



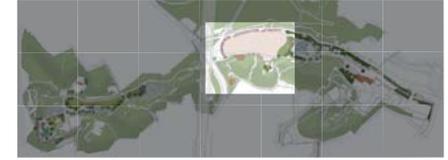
噴水周りの樹木など、視界を遮っているものを廃し、美術エリアから多目的広場まで視線の抜けをつくります。



ダンダンスステージから噴水アートを見る。

芹ヶ谷公園らしい活動が行われるアクティブなエリア

流鏝馬やさくらまつりの舞台となる多目的広場は、芹ヶ谷公園らしい地形の特徴を生かしたアクティブなプログラムが展開される広場になります。「エンガウステージ」は、普段は憩いの空間として、サクラの見頃の時は花見の舞台として活用されます。「シアターステージ」は、谷を背景に音楽やダンスなどが行えるような、この場所ならではの舞台空間を創出します。「タニステージ」は滞留空間としてだけでなく、自然観察など様々なワークショップが開催される場所となります。谷を形成する森の中にも森林浴など芹ヶ谷の自然を堪能できる「モリステージ」を整備します。



花見の舞台にもなるエンガウステージ。多目的広場を眺める場ともなります。



シアターステージ。ライブやダンスなどの舞台となります。



タニステージ。階段状に作られたステージは、自然観察やワークショップなどのプログラムが開催可能です。

公園と連続し、パークミュージアムへと 美術活動を展開する拠点「美術エリア」を整備します

“パークミュージアム”は、通常の博物館や美術館のように展示されているものを鑑賞するだけでなく、町田の多様な文化芸術の活動や公園の豊かな自然を体験しながら学び楽しむことができる新しい体験型の公園を意味しています。

特徴的な谷戸地形や緑、湧水など、芹ヶ谷公園の恵まれた自然を感じながら、誰もが多様なアート活動に五感を通じて触れられる“ここならではの”体験を提供します。

芹ヶ谷公園との一体的な整備にあたり、美術館の整備においても、町田らしい多様なアート・カルチャーを体現する魅力的な企画やイベントが、美術館に留まらず、緑あふれる公園の空間やまちなかと一体となって展開されている“パークミュージアム”ならではの、みんなに親しまれ愛され続ける美術館を目指します。



▶文化芸術・自然との出会い方を演出する「冒険的回遊性」

芹ヶ谷公園で見つけた谷地形の冒険的な体験や魅力を、美術館に限らず、公園内に点在するステージのデザインに取り入れ、美術エリア全体に「冒険的回遊性」を生み出します。文化芸術・自然との出会い方を演出することで、芹ヶ谷公園を訪れる人たちが日常生活の中で多様な文化芸術に触れられる接点を増やします。



先を想像しながら、曲がりくねった園路を登る。歩いていて楽しい森の中の道。



園路を登っていると、もみじ園や広場を高い位置から望む風景と出会う。



トンネルを抜けると、視界が開け、また違った風景が広がっている。



谷の奥の方へ行くと、そこには子ども達の遊び場空間が潜んでいる。

▶芹ヶ谷公園の「冒険的回遊性」を活かした散策動線

①既存の園路からもみじテラスに渡る

新たに整備する(仮称)国際工芸美術館の屋上テラスは、既存の園路と接続された新たな園路となります。



②もみじテラスからもみじ園を望む

もみじ園を上から見下ろす新たなビュースポットとなります。



③(仮称)国際工芸美術館ロビーを見下ろす

園路の途中にロビーを見下ろすことのできるスポットをいくつか設けることで、日常の中に美術との出会いを作ります。



④せせらぎテラスから谷のロビーへと繋がる

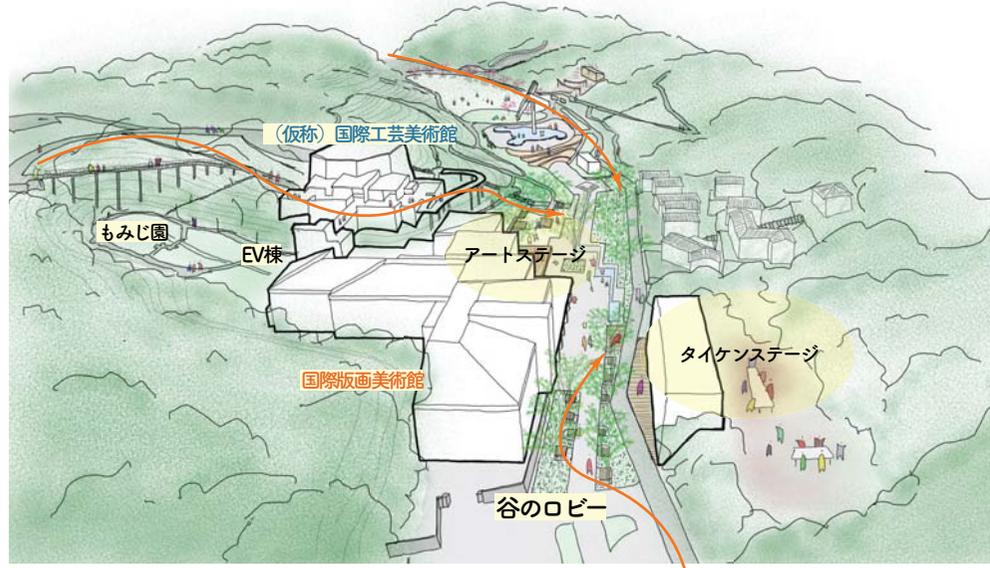
森の中を歩く空中スロープと繋がるせせらぎテラスでは、谷のロビーを眺める場所となります。



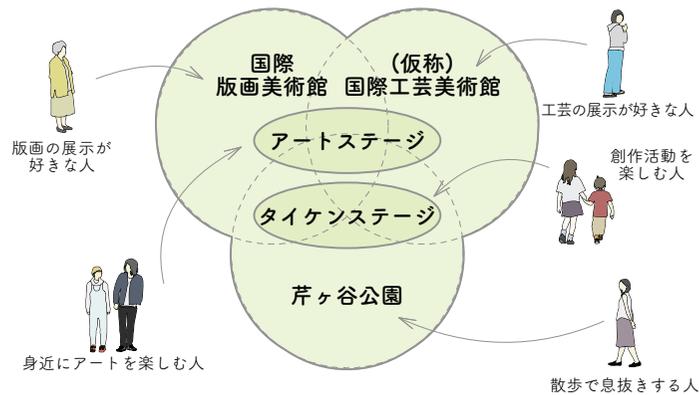
美術館と公園の一体的な整備について

▶谷のロビーを中心とした美術エリアの形成

美術エリアには、パークミュージアムに美術活動が展開していく場として、(仮称)国際工芸美術館の整備とあわせて新たに「アートステージ」や「タイクンステージ」など、美術活動をより身近に感じられる場や、多様な創作活動が行える場を整備します。



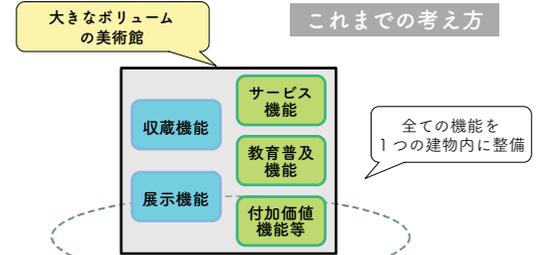
2つの美術館と公園の活動や空間の繋がりを生む新たなステージの整備により、より多くのひとが集い、多様な文化芸術に親しむ場と機会を提供します。



▶美術館における様々な機能を公園内に再配置します

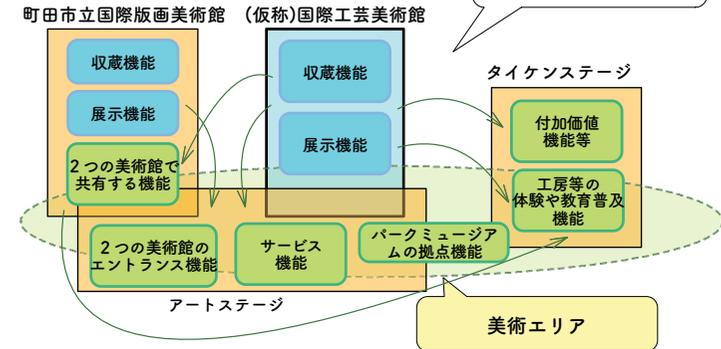
美術館のコアとなる機能(展示・収蔵等)を中心としたコンパクトな(仮称)国際工芸美術館を整備する一方で各種のサービス機能や工房等の体験や教育普及機能については公園全体の施設や機能と一体的に捉え、効果的・効率的な機能の再配置を行い、新たに美術エリアを形成します。

公園内に展開された機能はパークミュージアムの体験・活動ステージとなり、公園に求められる機能を充足するとともに、公園を訪れる多様な人々が気軽に文化芸術に触れられる場になります。



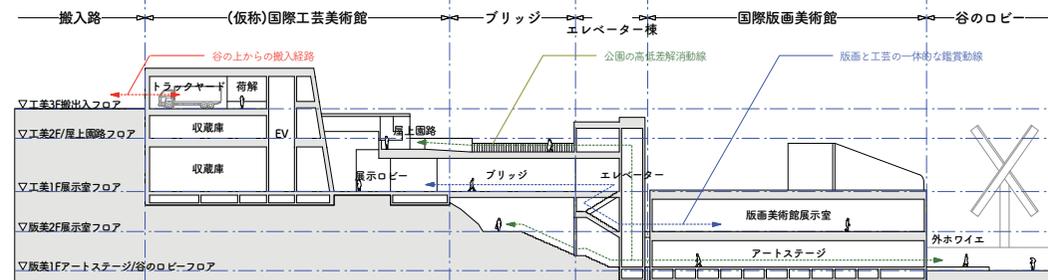
パークミュージアムにおける美術エリアの考え方

新しく整備する美術館の中だけにとどまらず、公園全体に体験・活動が展開



▶地形を活かした断面計画

美術館を介した新たな動線が公園内の高低差を解消し、まちなかの回遊性創出に寄与します。また、収蔵庫やバックヤードを集約することで、機能的で合理的な計画とすることができます。そして高低差によって公園から連続してアプローチすることができる展示室の屋上空間を、公園を楽しむ新たな園路として再構築することで、動線的にも公園と一体となった計画となります。



▶国際版画美術館と
(仮称)国際工芸美術館の
一体的な整備計画について

統合・拡張された
美術館

国際版画美術館、(仮称)国際工芸美術館を一体的に統合・拡張整備するとともに、芦ヶ谷公園とも連続し一体感を感じることができるよう計画することで、パークミュージアムにおける美術体験の拠点となります。

ひらかれた美術館

創作と対話を目的とする“こと”のためのアートセンター機能を担う「アートステージ」を、新たに現在の国際版画美術館内に計画します。様々な人々が様々な方法で美術館に参加することができる新たな美術館のあり方を検討していきます。

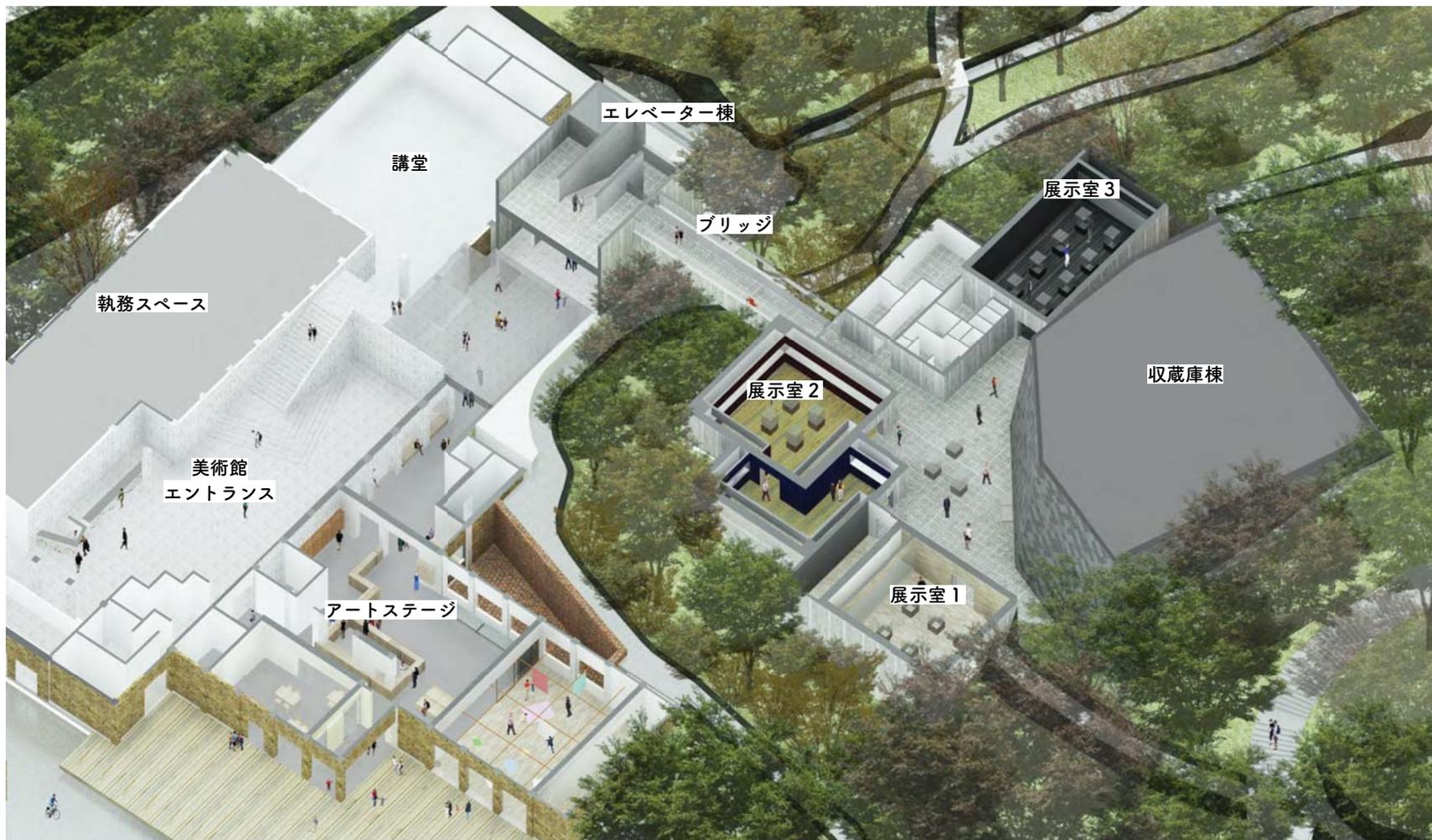
▶(仮称)国際工芸美術館の
整備計画について

ランドスケープと
一体となった美術館

国際版画美術館と連続する適切な位置に公園の谷地形に沿った配置を計画します。バリアフリールートとなるエレベータとともに、ランドスケープと一体となった回遊性を持つ美術館となります。

コンパクトな美術館

展示機能と収蔵機能を中心としたコンパクトな美術館を計画することで、建築面積を最小限にする計画です。サービス機能や体験機能、教育普及機能は公園全体で効果的・効率的に機能配置します。



▶国際版画美術館と(仮称)国際工芸美術館の
一体的な執務スペースの整備計画について

国際版画美術館・(仮称)国際工芸美術館のスタッフ執務スペースを国際版画美術館の既存バックヤードに一体的に整備することで、両美術館の執務スペースの効率化を図り、スタッフの業務連携やコミュニケーションの円滑化を促します。
パークミュージアムにおいて、一体整備後の美術館では、アートステージの企画や谷のロビーのイベントなど、分野を超えた様々な人々との協働の機会が増えることが想定されます。
執務スペースはスタッフの働きやすい環境を整え、異なる職種のスタッフ間にもコミュニケーションが生まれ、これからの美術館の運営企画を積極的に考えられるようなスペースとして計画していきます。

ゾーニングと動線の整理による
使いやすい執務スペースの確保

両美術館スタッフによる執務スペースの共有化に対して、これまでの使い勝手の良さを残しながら、適切なゾーニング、動線計画を行います。既存間仕切りを一部撤去し、必要スペースの拡充を図ると同時に、学芸員ゾーンではデスクまわりの資料スペース等にも配慮した計画とします。

展覧会準備や打合せに利用できる
プロジェクトルームの設置

執務スペースのエリアに、複数の独立した「プロジェクトルーム」を設置します。学芸員が展覧会の企画打合せ～準備作業などの集中した執務を行えるなど、より充実した展示をプロデュースするための拠点となります。部屋の中の様子が見える設えとすることで、他のスタッフにもリアルタイムで状況が共有できます。

スタッフ間のコミュニケーション
促進やアメニティーへの配慮

美術館の運営には様々なスタッフに関与しますが、これからの美術館にとって、異なる職種間のスタッフ同士のコミュニケーションや協働は、より重要となります。日常業務の中のちょっとした打合せが可能なスペースや、コミュニケーションを促す休憩スペース等も執務スペースのエリア内に分散して計画します。

(仮称) 国際工芸美術館の整備について

▶国際版画美術館と親和性を持つファサードデザイン



A.谷のロビーから両美術館を見る

展示室棟と収蔵庫棟で異なる外壁素材を用い、周囲の環境と合ったスケール感とすることを考えます。展示室棟は、国際版画美術館の雁行する形状に沿って、建物ボリュームを分節し、公園の中でオーバースケールとならないように配慮します。3層の収蔵庫棟は、用いる素材の単位大きさやモジュールは十分検討し、色味にムラを出したり、貼り方に変化を持たせることで、圧迫感を与えない印象となる外壁素材を検討します。



B.マイスカイホール周辺から見る

▶公園の環境と調和した外壁素材の選定

隣接する国際版画美術館や、樹木の緑と馴染むよう、グレー系のモノトーンの色彩を採用し、建築が主張しすぎず、将来的に再度森が育った際に、周囲と調和する建築を目指します。収蔵庫棟は、森の中で経年変化に対しても、汚れが目立たない色とし、耐久性・耐候性のある素材とします。展示室棟では、コンクリートでありながら、木目の柔らかな表情を与える外壁素材を採用します。



C.鳥瞰

▶様々なスタイルの展示に対応するフレキシブルで多様な展示室

展示室1/工芸品の生活における利用を想定した日常的な展示



日常的な親しみのある展示空間とします。自然光を採り込み、芹ヶ谷公園を臨む窓を設置することで、周囲の場所性を展示室内に取り込みます。展示台や独立ケースを使用します。

展示室2/工芸品の色や形などの正確な展示



展示ケース内で工芸品を正確に見せつつ、展示室全体では華やかな展示空間とします。壁面に展示ケースを常設することで、展示替えが容易な安定した展示環境を確保します。

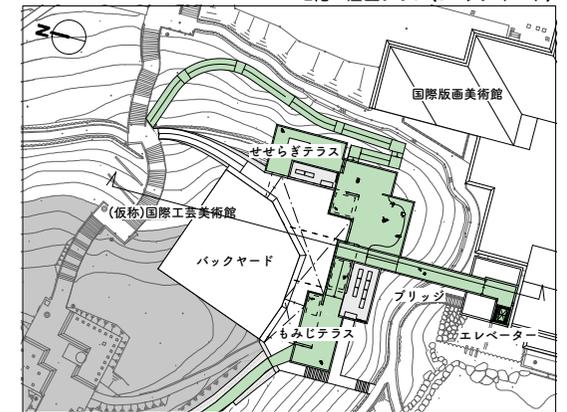
展示室3/工芸品の特徴を際立たせる演出的な展示



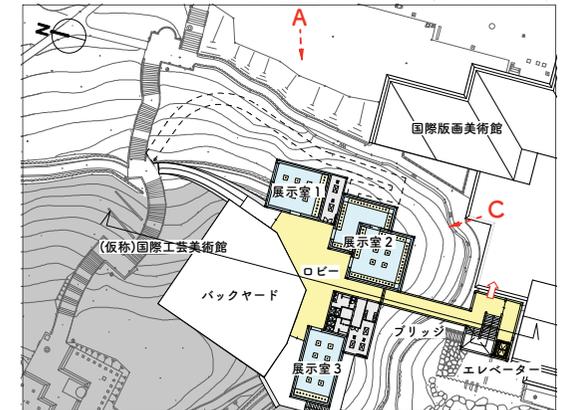
工芸品に集中させる緊張感を持った展示空間とします。ライティングを行う演出的な展示に対応し、工芸品を際立たせる背景となるニュートラルな展示室です。主に可動式の独立ケースを使用します。



2階：屋上テラス(+バックヤード)



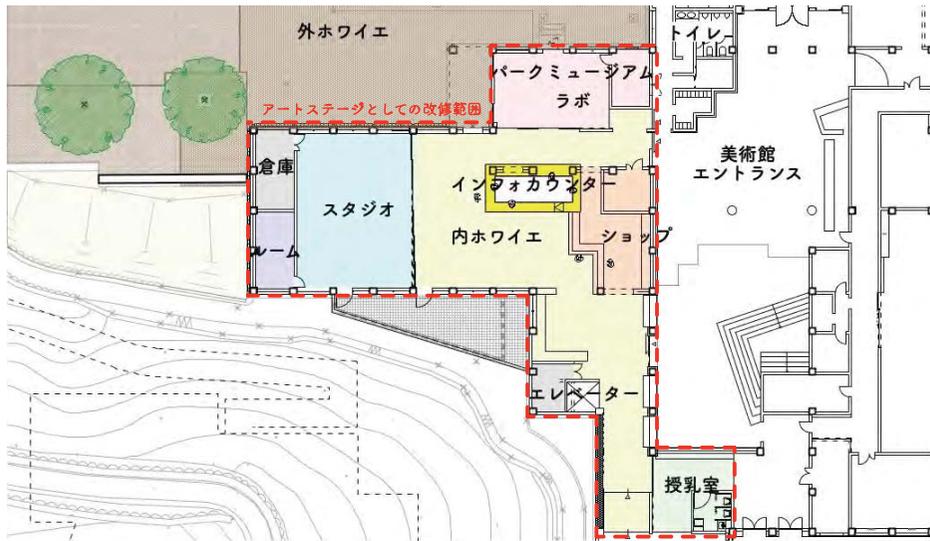
1階：展示フロア・ロビー(+バックヤード)



アートステージの整備について

▶アートステージの空間構成イメージ

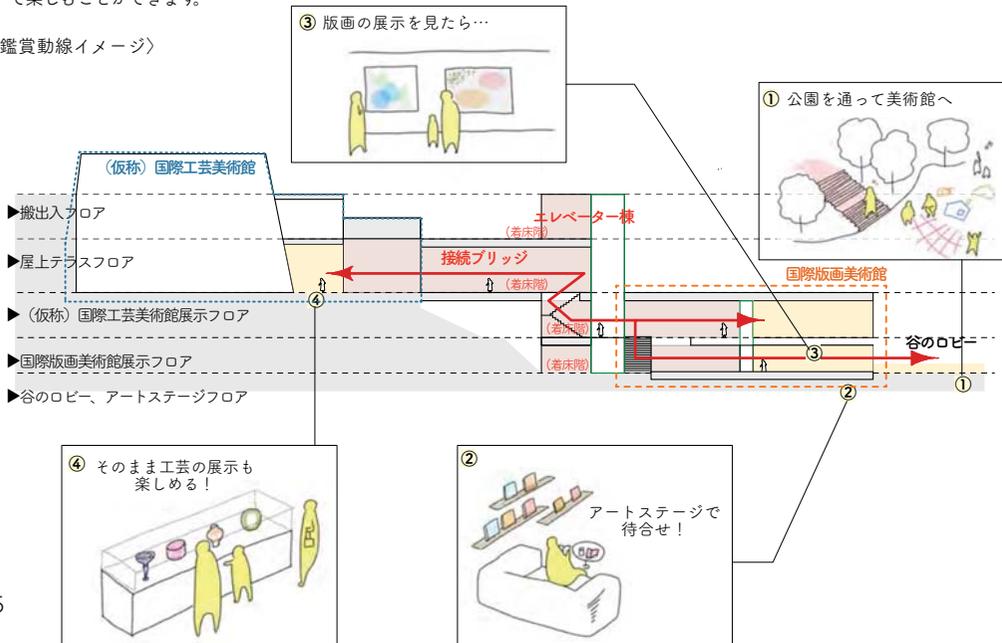
国際版画美術館の1階の一部を改修し、アートステージを整備します。



▶国際版画美術館と(仮称)国際工芸美術館の共有エントランスと鑑賞動線について

谷のロビーに面した現在の国際版画美術館のエントランスとともに、アートステージが両館共通のメインエントランスとなります。(仮称)国際工芸美術館は、国際版画美術館とブリッジにより繋がっており、版画と工芸品の両方の展示エリアをシームレスに移動して楽しむことができます。

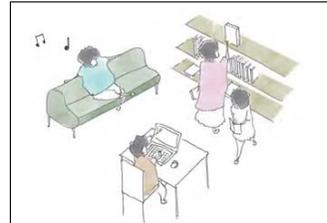
(鑑賞動線イメージ)



▶これからの美術館に求められる役割を担う「アートステージ」

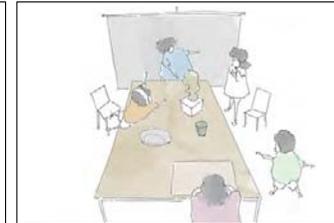
新たに整備する「アートステージ」は、美術館の新たな顔となる導入空間です。これまでの美術館は、美術品を収集・保存・調査研究・普及・展示する役割を担ってきました。これからの美術館には、それらに加えて、「創作」と「対話」という役割がより求められています。今回の新たな美術館整備においても、「もの」の鑑賞を軸においた展示フロアに加えて、「こと」のための空間・場として「アートステージ」を新設し、子どもを含めたあらゆる人たちに参加・体験を提供します。また、国際版画美術館内にあった版画工房や飲食機能等はタイクンステージ内に移ります。

① サードプレイスとしての役割



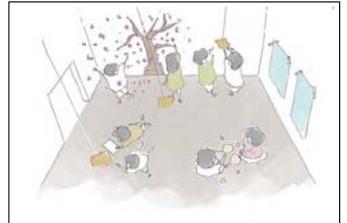
美術には社会包摂的な働きがあります。創造的なコミュニティのための居場所となる、サードプレイスとしての役割を担います。

② アートセンターとしての役割



アート(美術)を媒介として、人々と美術品が集まる場となる、アートセンターとしての役割を担います。

③ 現代の美術表現に対応する役割



参加型アートやパフォーマンス・アート、インタラクティブ・アートなど、現代の美術表現に対応する展示空間としての役割を担います。

▶アートステージの諸室構成

多様な表現のための場

●スタジオ

多様化する美術表現に対応する新たな展示室として、「こと」としての美術が展示できる舞台のような場を計画します。さまざまな機能を持った天井を持つアートステージの中心的な空間とします。

●ルーム

スタジオに対する控室(楽屋)の役割とし、美術館におけるゲストの居場所をつくります。機密性のある少人数の会議室としても使用可能です。

日常的な集団活動のための場

●パークミュージアムラボ

パークミュージアムを担う人々の拠点として、部室のような場を計画します。ミーティング・作業・レクチャーなどを実施可能で、普段は活動の様子が見える必要場合には建具で仕切ることができます。

居心地の良い滞在のための場

●ホワイエ(内ホワイエ、外ホワイエ)

サードプレイスとして、展覧会を目的とした市民だけでなく、あらゆる市民を包摂する、ホワイエのような場を計画します。活動や展示を行うこともできるフレキシブルな空間で、市民の居場所となります。

●インフォカウンター

パークミュージアムの情報提供の場として、美術館や各ステージの活動の情報などを入手できるカウンターを配置します。

●ショップ

●授乳室・親子コーナー

タイケンステージの整備について

▶タイケンステージコンセプト

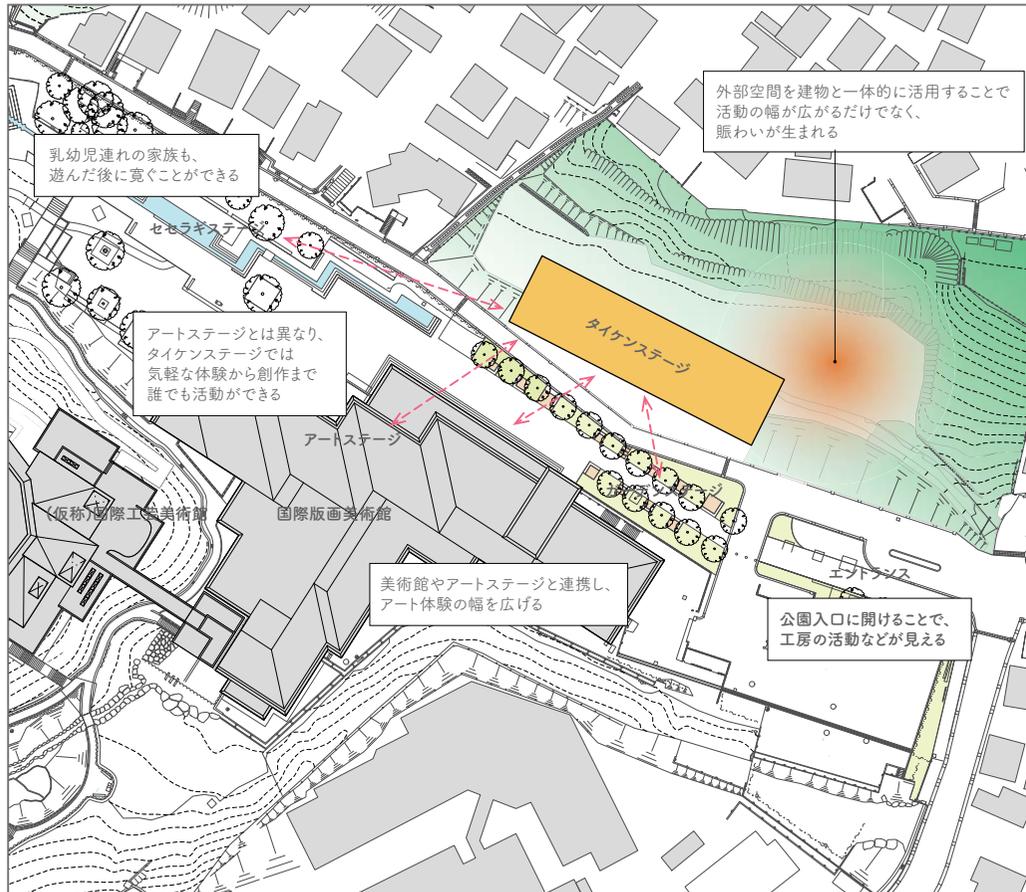
パークミュージアムにおいて、創作を通じて美術や文化を体験できる場所

工房機能を中心としながら、美術エリアにおける創作や体験を担う拠点として、多様な世代の人々が文化に触れ合うことができる様々な活動を提供していきます。ここでは多様な体験を通じて自然溢れる公園や美術館での活動へ誘い、パークミュージアムと出会うきっかけを生み出していきます。

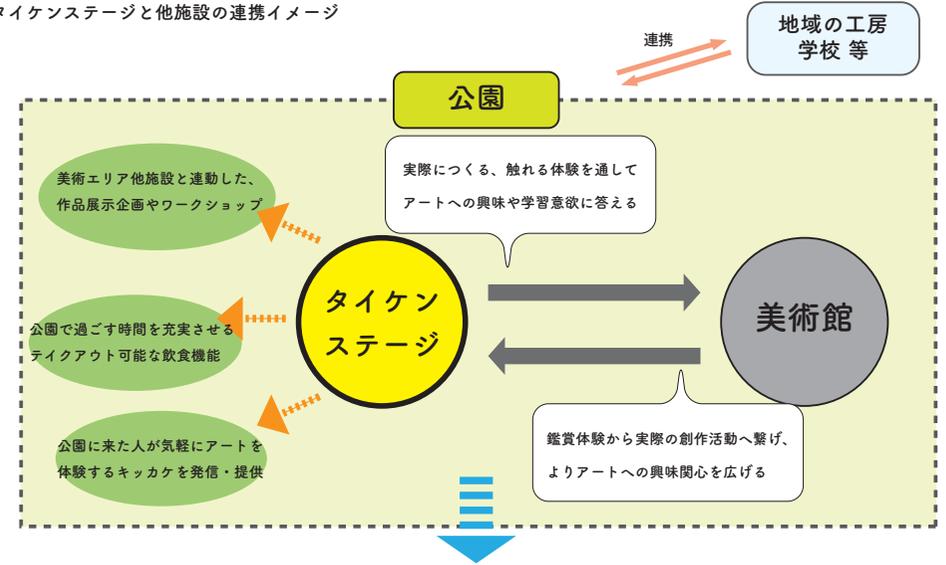
▶タイケンステージについて

公園に対し開かれた創作体験の拠点。より多くの子どもや市民に実際にアートと触れ合う機会を創出する場所として、版画工房に加えガラスや陶芸の制作できる体験工房を設けます。またパークミュージアムの運営管理事務所機能と一体として整備することで、パークミュージアムと連携したイベントや展示企画を積極的に行うことを目指します。併せてオープンスペースを併設させた飲食機能を設け、利用者・来園者のコミュニティ形成を行う場所としての役割を担います。

▶タイケンステージ配置イメージ



▶タイケンステージと他施設の連携イメージ



パークミュージアム全体と連動しながらアートに触れる機会を作り出し、多様な人々の興味・関心を育むことで町田の文化を醸成していく

▶タイケンステージの機能と役割

- 工房機能**

想定用途：版画制作 / 陶芸体験 / ガラス体験 等

 - 市民が創作を楽しみ、芸術に触れる機会を提供
 - 子どもの体験プログラムの充実
 - パークミュージアムの中のものづくりを通じた交流拠点としての工房
- サービス機能**

想定用途：カフェ / オープンテラス 等

 - オープンなスペースがある多様な世代が集うカフェ
 - 公園内他施設と連携し、公園滞在の時間を豊かにする飲食提供
 - 展覧会やワークショップ企画との連携を行う、活気あふれる場所
- マネジメント機能**

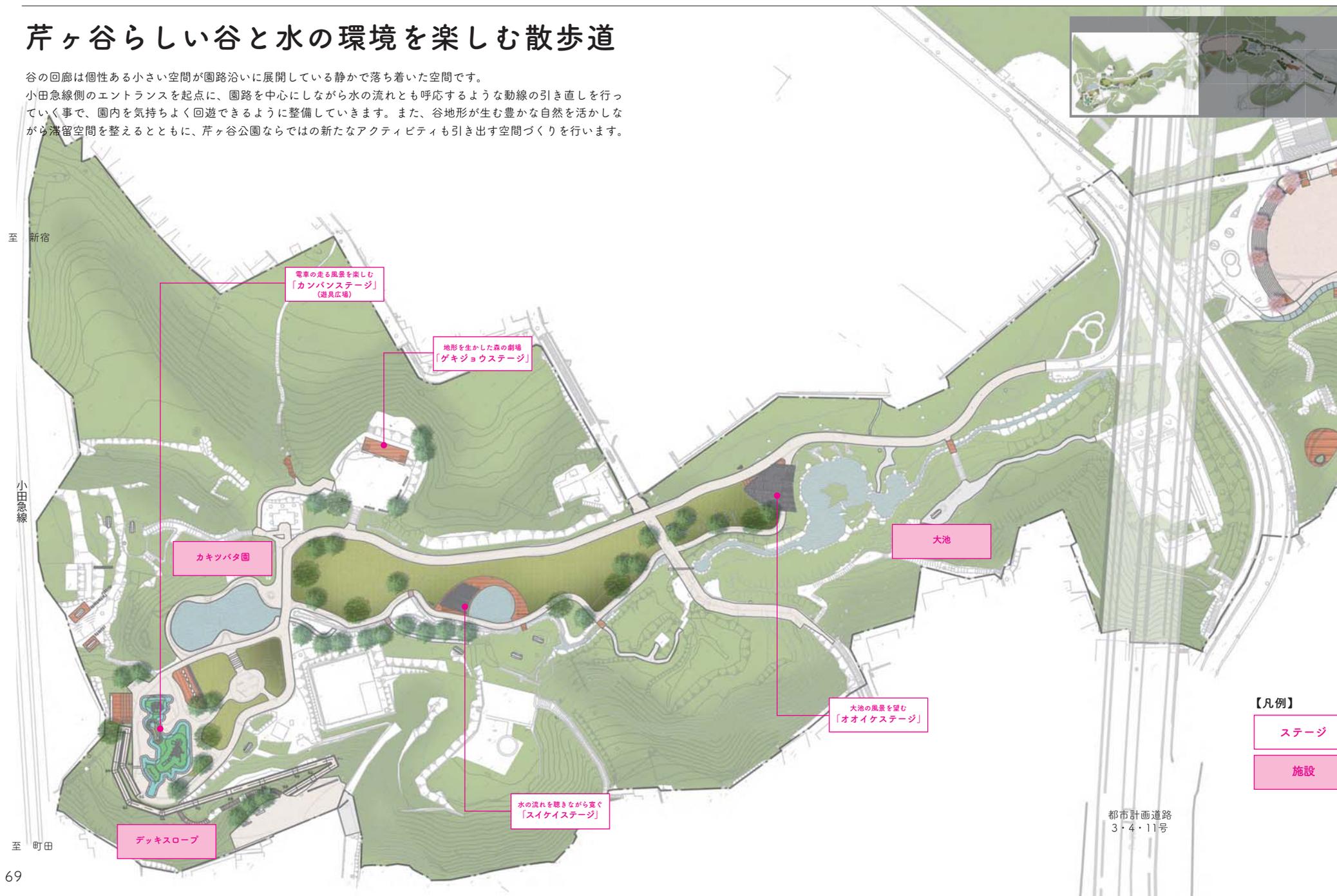
想定用途：パークミュージアムラボ事務所 / 倉庫 等

 - パークミュージアムの運営拠点
 - より多くの人たちが安心して過ごすための行き届いた公園管理
 - パークミュージアムの活動への入り口となる情報発信の場

芹ヶ谷らしい谷と水の環境を楽しむ散歩道

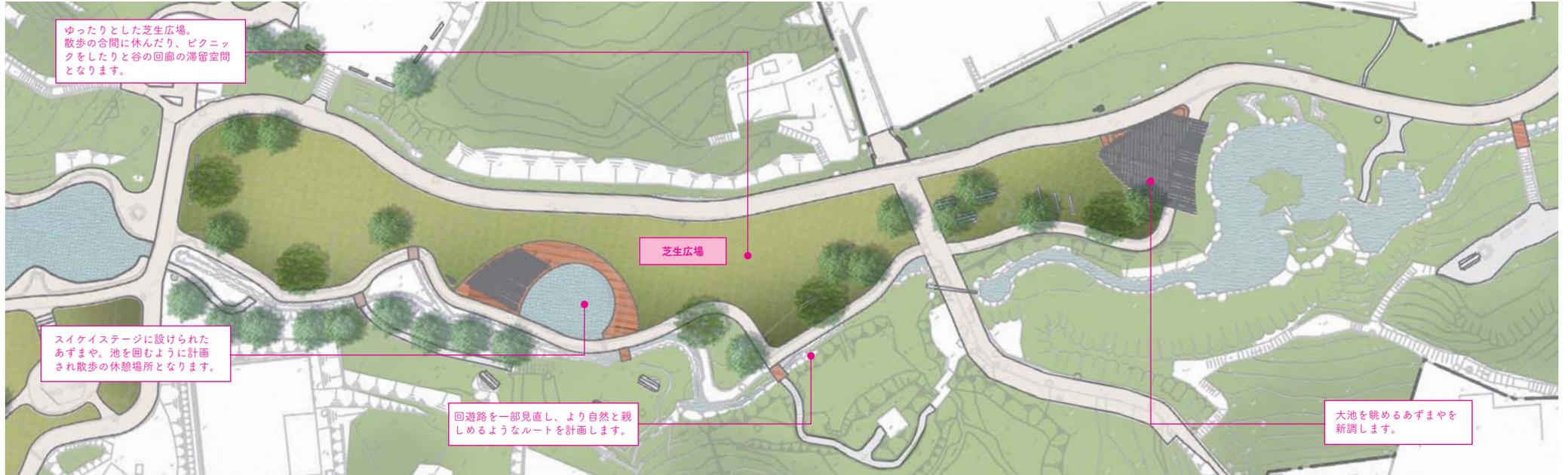
谷の回廊は個性ある小さい空間が園路沿いに展開している静かで落ち着いた空間です。

小田急線側のエントランスを起点に、園路を中心にしながら水の流れとも呼応するような動線の引き直しを行っていく事で、園内を気持ちよく回遊できるように整備していきます。また、谷地形が生む豊かな自然を活かしながらか滞留空間を整えるとともに、芹ヶ谷公園ならではの新たなアクティビティも引き出す空間づくりを行います。



芝生広場と水の流れ、ゆったりとした散歩道

新たに整備する回遊路を散歩しながら、水辺の生物の観察や、あずまやで休憩、芝生でピクニックができるなど、訪れた人それぞれが思い思いの時間を過ごすことのできる居心地の良い空間を創出します。



スイケイステージ



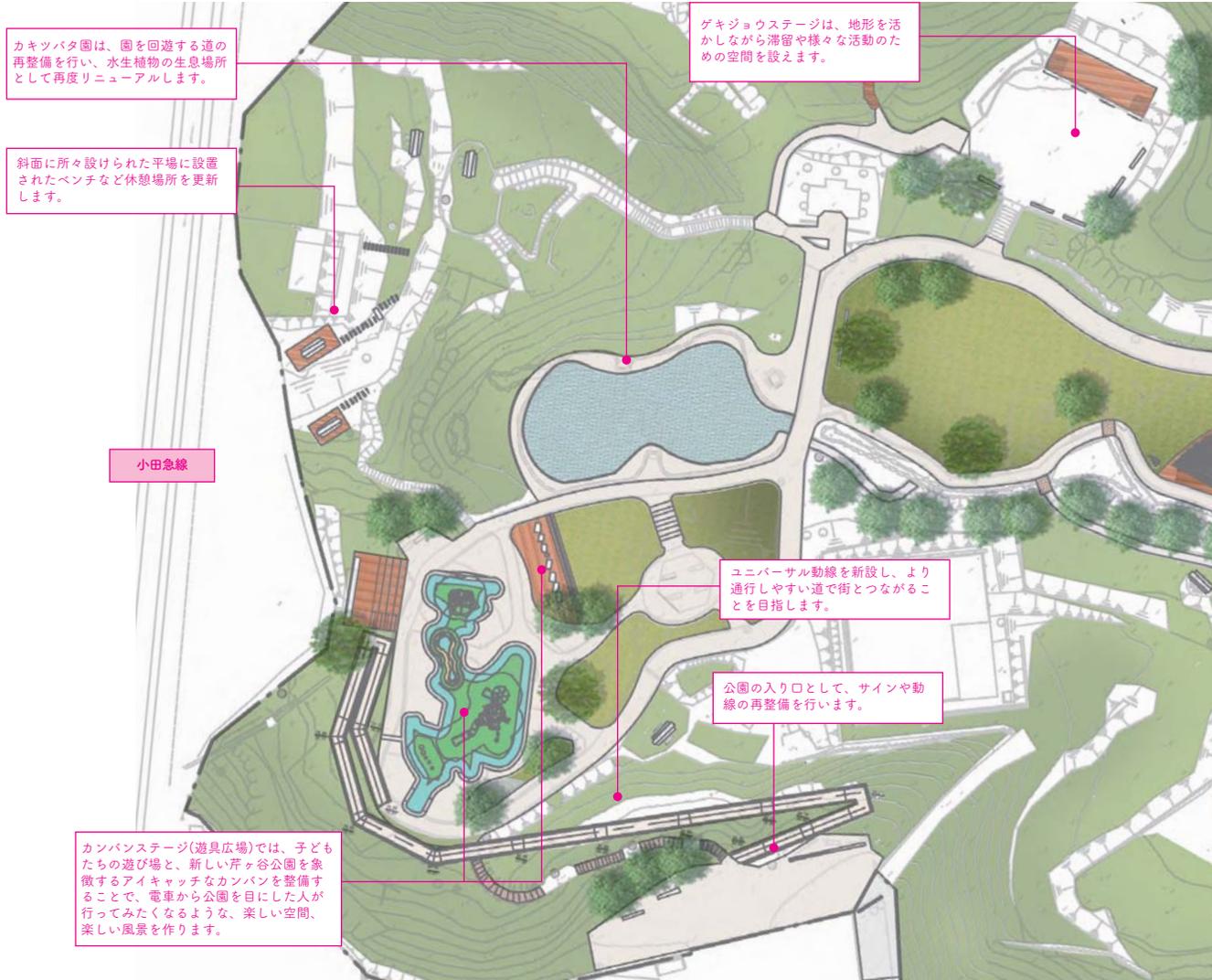
オオイケステージ



大池に面したあずまや。谷に囲まれゆっくりとした時間が流れる散歩道。

子どもの遊び場と電車から見える芹ヶ谷公園

小田急線線路に近いエリアは、今回の整備で大きく変わるエリアの一つです。エントランスからのユニバーサル動線、アイキャッチとなる新たな看板（サイン）、子どもの遊び場など、エリアの活性化につながる整備を行います。特にカンバンステージ（遊具広場）では、「電車に乗っている人から見える芹ヶ谷公園」という視点に着目し、緑の豊かさや「パークミュージアム」の雰囲気が伝わる整備を行います。



カンバンステージ（遊具広場）は、小田急線からの視点を考慮して、芹ヶ谷公園のPRにつながるあり方を検討しています。



ユニバーサル動線のスロープを設けることで、街とのつながりを強化します。